



毎月28日に清水寺境内で開かれるOKAGESAN1000マーケット

## 清水 第二二六号 目次

表紙題字・良慶和上筆 表紙写真・石仏に咲く彼岸花

特集 清水寺第106回うらぼん法話

「幻の御開帳から見えたもの」

北法相宗管長 清水寺貫主 森 清範

「悟りを超える」

元花園大学学長 文学博士 西村恵信

「歴史に学ぶ平安京 清水さまと天神さま」

北野天満宮宮司 橘重十九

「日本の和らい」

大藏流狂言師 茂山逸平

「聖徳太子のころ」

聖徳宗管長 法隆寺住職 古谷正覚

大西良慶和上法話「太子和讃講話」③

五明洞浄墨 大西良慶和上題詩

「四十手深要決義」を読む 第23回 清水寺執事補 森 清顕

「清水寺・古写真館」 竹原友三郎氏寄進の狛犬

『成就院日記』翻刻・刊行にあたって② 清水寺史編纂委員 下坂 守

清水寺大事典 その十三

青龍守、諸堂荘嚴の几帳をお守り袋に

ゆかりの磐梯中学・黒羽中学、修学旅行来山

名古屋音羽の会が十周年入り、夏の恒例参拜

南部風鈴の短冊に世界平和を祈り飾り付け

京都伝統工芸大学校が風船アート彩り作品展

柿本ケンサク氏が清水寺境内で新作写真展

世界音楽の祭日に100本のトランペット演奏

コロナ禍を越えて西国霊場月参り巡礼再開

彼岸に神仏合同で七夕願文お焚き上げと大護摩供

造幣局が清水寺を題材に国宝章牌を製造・販売

内外往来

編集後記

## ◆特集◆ 清水寺 第106回 うらぼん法話

京都の夏の風物詩になっていきます清水寺の「うらぼん法話」が、今年も八月一日の開白から五日の結願までの五日間、大講堂の円通殿などを会場にして開かれました。昨年に続いて新型コロナウイルス感染症拡大が猛威を振るう中、感染対策を万全にしての法座開講となりました。

恒例の法話会は中興開山大西良慶和上が大正四年（一九一五）に暁天涼風の法施として始め、今年で第百六回を迎えました。

コロナ禍が依然として衰えず、感染者数が連日のように過去最高を更新する流行「第七波」の中で、昨年と同じく円通殿を養生して、聞法の人々が間隔を空けて座るよう、すべて椅子席にし、入り口には検温器と消毒液を置いて聞法の人たちに注意を促す対策を取りました。また例年の洗心洞の会場に加え、

円通殿の外側にテントを立て椅子席を置きモニターからも聴聞できるようにしました。こうした厳しい状況の中でも、「うらぼん法話」を待ちかねた聞法の人たちが早朝六時の開講前から次々と訪れ、円通殿内は連日、ほぼ満席となりました。

開白の初日は元花園大学学長・文学博士の西村恵信師が「悟りを超える」と、二日は北野天満宮宮司の橋重十九師が「歴史に学ぶ平安京 清水さまと天神さま」と、三日は大藏流狂言師の茂山逸平師が「日本の和らい」と、四日は聖徳宗管長・法隆寺住職の古谷正覚師が「聖徳太子のころ」と、結願の最終日は北法相宗管長・清水寺貫主の森清範師が「幻の御開帳から見えたもの」とそれぞれに題して話しました。森貫主の法話は全文を採録し、ほかの四師については要旨を掲載します。

# 幻の御開帳から見えたもの

清水寺貫主 森 清 義

おはようございます。ようこそ、当山の伝統であります「うらぼん法話」に早朝からご出仕いただき、きょうは五日目の結願であります。無事、本日を迎えられることをありがたく思います。

コロナ禍が大変であります。あまり大きな声を出さなというので、大声で法話してはいけないのですが、消毒をして、せいぜい密集にならようにして、風通しをよくして行いたいと思います。しかし、マスクは外せません。鬱陶しいことです。マスクしてきますと顔が半分隠れます。逢っても誰か分かりませんね。この前、朝歩いていましたら、「おはようございます」と挨拶されました。こちらは法衣を着ていますので分かりますが、こちらから向こうが誰か分かりません。加えて帽子でもかぶっていたら、もう一つ分からなくなります。それでも、「おはよ



うらぼん法話結願法要。今年も新型コロナウイルス対策をとり開かれた

うございます」と言われたら、「おはようございます」と挨拶を返します。

新聞にこんな句が出ていました。

おばあさんマスク取ったらおじいさん

確かに、この句の通りです。見分けがつきませんね。しかしながら、コロナ禍が収まるまで、しばらくはマスクを外せません。

## 心の中を見せない日本人

日本人は案外、口を隠すことに抵抗感がありません。マスクをするくらいのは問題ではありません。その点、欧米の人は口を隠すのを嫌がり、マスクをするかしないかをめぐって大問題になります。ところが、欧米の人は目を隠すのは歓迎していません。進んでサンングラスをかけます。

東京大学名誉教授の原島博という先生が著してあります本をパラパラと読みました。顔学とあります。顔が持っている、さまざまな動きを研究する学問です。その原島先生の研究によりますと、目元というのは、その人が何者であるか、表面上のことが出る



法話する森清範貫主

そうです。それでは口元はどうかといいますが、その人の心の中が出ているといえます。なるほど、それで日本人は口元を隠すのに抵抗がないのかと分かりました。日本人は心の中を人に見せたりしません。他所よその家に行くのに「この菓子がいいだろう」とわざわざ買い求めて持って行っても

「ほんの粗葉です」と遠慮して置いて帰ります。「これはいい菓子だよ」と言う人は少ない。そう思っ  
ていても心の中は見せたがらない。京都でよくある  
話ですが、見合いをした娘さんにお母さんが「あの  
人はどうや、嫌いか」と聞きますと、娘さんは「嫌  
いや」とは言いません。「好きになれないだけです」  
と上手に、遠回しに、控え目に言います。心の中を  
知られたくないのです。

こういうことで日本人は口元を隠すのに抵抗感がないのです。鞍馬天狗も月光仮面も口元を隠しています。ところが欧米のヒーローはバットマンも怪傑ゾロも目元を隠しています。生活習慣の違い、文化の違いがあります。

### 幻となった仏性寺の御開帳

コロナ禍が始まる前の令和元年、もう三年前になります。福井県大野市に仏性寺という曹洞宗の寺があり、その和尚さんが訪ねてきました。「うちの観音さんが令和三年八月に三十三年に一度の御開帳をしますので、御開帳法要の導師と講演会の講師に来

てくれませんか」と言うのです。「えっ、二年先ですか」「そうです」と和尚さんは平然としています。私の方はちょっと考えてしまいました。「二年先に元気でいられるかな。約束して行けなかったら、具合悪いしなあ」「いや、大丈夫」と和尚さんが太鼓判を捺すものですから、「それでは行きます」と約束しました。

仏性寺の和尚さんの計画では、寺で御本尊の御開帳法要をし、お参りの人に法話を行います。そして、その日の午後は大野市が文化講演会を開き、そちらの講師も私が勤めるというのです。「ええ、よろしおす」ということで行くことが決まりました。

和尚さんの方も大丈夫と太鼓判を捺しましたが、さすがに二年先は心配です。「時々挨拶に来ます」と言います。「いやいや、それはいいですよ」と言ったのですが、それから二、三カ月に一度は清水寺に登って来るようになりました。敬意を表するのとともに、本当に大丈夫か確かめに来るのです。

御開帳には費用がかかりますので、「色紙に書きましたためてほしい」といいます。「よろしい」と書きました。半切の和紙に一行書も二十枚ぐらい書い

て渡し、資金づくりの一助にしました。「もう費用の面も大丈夫」ということになりました。大野市の文化講演会では「大きな紙に一字揮毫きごうしてほしい」というので、紙も筆も墨も送って準備万端整えました。

さあ、いよいよという三日前です。実は中止になりました。本当に三日前です。市のコロナ感染防止対策で他府県から人を入れてはいけないことになったのです。二年前から準備してきて中止です。大変なことです。しかし、仕方ありません。こうして御開帳が幻になりましたので、きょうは「幻の御開帳」というタイトルで話をさせていただきます。

### 同木三体、兄弟の観音さん

仏性寺の和尚さんが最初に訪ねてきた時、数人の郷土研究者が一緒でした。「実は仏性寺は……:」という、その説明にびっくりしました。「仏性寺の御本尊と清水寺の御本尊は同じ時に同じ木で彫られています」と言います。清水寺の本尊さんに兄弟がいるというのです。「なんと奇遇な」と驚きました。

清水寺の縁起では宝亀九年（七七八）に奈良・子島



延鎮上人が音羽の滝の地に至り、行叡居士と対面し観音を彫るにふさわしい霊木を授けられる。箱崎陸昌筆「清水寺平成縁起絵巻」の一場面